

余が目に映じた佐々克堂先生

- 一、克堂先生の詩  
二、緒言  
三、第一篇 傳記資料としての談話 刪補  
四、第二篇 克堂先生訓育の一斑

函嶺開居和

明道先生韻

開居連日獨從容 竹色泉聲映夕紅 講道志因窮境立  
濟時心與古賢同 大觀天地百年外 一笑風雲雙眼中  
回首浮沈人世事 函山烟雨老英雄

說 明

此詩は先生稍晩年に屬する時の詩で得意の作である。此詩韻聯は先生平生の志で類聯天地を百年の外に大觀し風雲を雙眼の中に一笑する所先生晩年の胸懷なれば特に之を卷頭に掲ぐる事にした。

一、此編文章新舊式混合で蕪雜を極めて居るも彫琢を加へなかつた畢竟拙速を主とした爲りである。

一、先生の談話は熊本の方言であつた。全く普通語に引直せば先生の語氣語調を損するを恐れ已むを得ぬ所を除く外はごちらにも附かぬ書方をした。

一、先生が談話中に引用された古人の成句は其儘載せた其他の文句も成る可く當時先生の使用された通りにした。例へば道徳的修養と言はずして道義的練磨と言ふが如きである。

一、第二編は先生濟々覺に於ける訓育状況の一斑を語るが目的であるから余が先生より聞いた談話も同覺在學中のものに留めた。

## 余が目に映じた佐々克堂先生

### 緒言

佐々克堂先生胸像建設畢つて後發起人中に先生の傳記纂編の議が起り先づ其資料を蒐集することゝなつた。其手始めとして先生に親炙した舊門下生及び先生の舊友諸氏をして先生に就いて其知る所を語らせ其を速記する事になつた。余が談話は九日記者梅田君速記の勞を取られたが後で通讀して見ると談し方が蕪雜で脱漏も多く修正増補の必要を感じた特に先生の濟々覺に於ける教育に就いての談話に不備の多いことを知つた。又先生の教育は直接生徒と相接し心々相觸るゝ間に於いて靈活なる訓育の妙機が動くのであるから先生の教育を叙べんとすれば其訓育法を語る必要がある。這般の消息は先生門下生はよく了解して居る若し親炙して居た人々をして受けた感化の經過を語らしめば色々變つた體驗が表はれ先生の適性教育の全豹が見られよう余も先生に親炙し面命を受けた事は諸友より寡くないから先陣を承る覺悟を以て在學中自己の受

けた訓育の状況を記述して附け加へる事にした。

二

さて先生傳記の編纂は容易な業ではない現在は資料の蒐集すらまだ完了しない有様傳記の成るのは前途猶遠の感がある然るに一方には胸像が機縁となつて先生の教育に就いて知らんと欲して居る人もあり又意外にも誤つた見解が傳へられて居るとも聞くので不圖思ひつき談話の速記と後に執筆した者とを合せて小冊子となし謄寫に代へて印刷に附し一は之を發起者諸友に呈して批正を乞ひ一は之を教育界の懇意な諸友に呈して克堂先生の教育を知る参考に供する事にした全豹の出づるを待たずして一斑を掲げて人に示す僭越の罪は發起者諸友幸に余が心事を諒として宥恕されん事を願ふ。

## 余が目に映じた佐々克堂先生

野 田 寛

### 第一篇 傳記資料としての談話 刪補

#### 一、克堂先生の性格

維新の風雲は其前後に於て我肥後にも幾多の俊傑偉材を鬱蒸發生させた佐々克堂先生も其一人である。先生名は友房字は亮郷で號は初鵬洲と言つたが後又克堂と號せられた先生の經歷を一瞥すると安政元年正月熊本内坪に出生され八歳時習館に入つて漢學を學び十六歳の時居寮生員に擧げられ廢館の後は國友昌氏の門に入り傍ら林藤次氏に就て國典を學ばれた。明治十年西南戦役の時は池邊吉十郎氏等と共に西郷隆盛に興みして熊本隊の樞機に參畫し兵敗れて降服されたが赦されて出獄の後濟々齋を創立し又紫溟會を興し次で國權黨を組織し選ばれて代議士となり中央政界に出ては國民協會

帝國黨大同俱樂部等に於て其領袖となり政界一方の重鎮であつたが明治三十九年九月二十八日を以て東京の僑居に歿せられた。先生は『平生以君子之心行英雄之事文武一致剛柔兼濟以護持皇室於無窮宣揚國威於八表』(先生自身の語)を抱負として居られたが不幸にして事志と違ひ一生を轆轤の中に過ごし十分に其驥足を伸べる機會を得られなかつたのは實に遺憾の極みである。世に何等の主義主張の持合せもなく唯時勢と俯仰して官海に游泳し或は政界に盤遊し幸に好機會を攫んで臺閣に上り爵位の赫赫で郷里の小兒に誇る徒輩も尠くはない此等を以て先生に比較すれば孰れが優で孰れが劣か成敗利鈍で人物を評價するは衆愚の仕事である數奇の李廣を以て幸運の霍去病に劣り敗死した真田幸村を以て無傷の本多忠勝に劣るとは具眼の人は認めまい。

さて先生はどんな性格の方であつたか余が見る所では知情意が三つとも高度に發達して居られて辭を換へて言へば知仁勇の三徳を具備して居られた方だと思ふ。先づ知の方面から觀察しよう第一先生は先見の明を持つて居られた其一例を擧ぐれば先生は早くも東洋將來の多事を察し志士を養成して朝鮮支那に送られた事もあつた次には人

を知るの明を持つて居られた先生が其門下の適材を適所に配置されたのは其適例である。次には事物の表裏精粗を洞見するの明を持つて居られた先生が早くも明治初年の政府の教育方針の缺陷を指摘して居られた等も其適例の一と言へよう。次には臨機應變の機智に富んで居られた先生の友人柴四朗氏も其漫遊記に機智に富んだ九州の人物佐々友房と稱して居るのは裏書きと見て差支あるまい。次には思慮周密である先生の友人頭山滿氏は語る『俺は敵を見ると正面から張り倒し其儘後をも見ずして行過ぎるが其奴がそつと起上つて來て後から俺が揚足を執つて引倒すこともある。しかし佐々には其れがない佐々は張り倒した敵の上に片足丈は乗せて離さない』と。頭山氏の談話は先生が用意の周到な性格をよく言つて居る。次には常識圓滿である先生壯年の頃は人往々佐々の名を聞いて英氣人を壓する武張つた軍人風の人と想像して居て面會して見ると豫想に反して常識圓滿な人たるに一驚したことは能く何人の話頭にも上つた事である。要するに知力の非常に卓越して居た事は争はれない。次には意の方面を觀察しよう先生が意志の徳たる勇氣に於ても群に超えて居られた事は先生が西南戰役に

參加して肥薩の間に轉戦された事蹟がよく之を語つて居る特に自ら信ずる所の主義を提げて起ち逆境に處して益振ふ所の勇氣が著しい其事は先生が學校を經營された事蹟と小數黨を提げて苦戰惡闘された事蹟に於て能く見ることが出来る。高橋長秋翁は常に言つて居られた『佐々は逆境に處することが最長所で如何なる艱苦の中に在つても必ず一つ自ら慰むる者を看出して居る』と眞に適評である。然し先生に最特色とするのは情であると思ふ凡そ知情意が揃ふて如何に高度に發達しても三者中必ず其人の特色が發揮されて居る歴史に現れた英雄を見ても豊太閤は知に於て古今の英雄が達した最高位に上つたことに於て徳川家康は鐵石の意志が群雄に秀でた點に於て特色を顯はし又支那三國時代の劉備は眞情の流露で生面を開いて居る余が先生の特色は情であると言ふのは其意味からである其事に就ては猶少しく説明して見たい。

昔孔子は子貢の問に答へて『仁者は己れ立んと欲して人を立て己れ達せんと欲して人を達す』と言つたが先生はよく之を實行して居られた先生が自ら就くべき光榮の地位を人に譲つて就かれなかつた例は尠くない其外先生が親戚故舊に對して情誼の深厚

であつた事は親戚故舊の人達がよく承認する所である先生は又容易に人を捨てられない『人には必ず長所がある如何なる人でも棄たるものはない』と平生信じて居られ短所の中から長所を發見して其れを助成しようと言はれたのである更に一步進めて言へば先生は情に脆い所がある昔范增は其主人項羽を評して『君王人となり忍びず』と言つたが余も此言を借つて先生に適用したい此れは甚だ失禮な申條なれども余は左様に信じて居る先生嘗て英國の政治家ジョセフ・チェンバレンを稱揚して居られたそれはチェンバレンが主張した大英帝國主義が先生自身平生の主張たる國權擴張主義に一致した爲で彼が愛蘭自治問題でグラッドストーンを突放した様な事は恐くは先生爲すに『忍びず』であると思ふ此『忍びず』の爲に先生政界では非常な不利な立場に立たれた事もあるが過を觀て仁を知るとも言へよう。

當時世間では先生を策士と見て居たが此れは頗る間違つた見解である先生が策士の様に見えたのは身を逆境から起して少數黨を提げて大政黨の間に介立たれた立場が然らしめたのである。先生は決して戰國策士風の權變の士ではない又濶達にして大節あ

りと言ふべき方だが豪放磊落ではない先生が政界に於ける駆引は余輩後進の素人の目には寧ろ堅實過ぎて見えた。中江篤介は一年有半と言ふ本を書いて其中に當時の諸名士の短評を試みて居るが先生を評しては『小心謹密』と言つて居る蓋し當らずと雖遠からずである。先生は日本幕末以來の人物では西郷隆盛と大久保利通の二人を最推重して居られ特に西郷の事蹟は四ヶ年計りも心を潜めて研究されたと先生自身の話である然し先生は此二人の孰れにも似ては居られない余が見る所では維新三傑の中では寧ろ木戸孝允に近似して居られる固より一から十まで似て居るとは言はない第一木戸の思想は稍急進的で先生は保守的である此點が已に違つて居る其外違つて居る所もあると思ふ然し大體に於て性行が大に似て居る明治十年に出來た木戸の傳に木戸の性行を描いて『毅然タル大節アリト雖其行極メテ篤敬』と又『風神高邁ニシテ賢ヲ敬ヒオヲ愛シ苟モ一技一能アル者ハ必能ク之ヲ容ル人ノ刺ヲ通ズルアレバ自之ヲ送迎シ會テ貴ヲ挾マズ人ト文書ヲ往復スル未嘗テ書辨ヲ用ヒズ性善ク恩ニ感ジ義ヲ思フ朋友故舊ニ篤ク云々』と言つて居るが此一句一句を拾つて皆先生に當て符めても少しも不都合はある

まい又木戸の傳に『艱難ノ事光耀ノ榮ニ遭遇スル毎ニ輒チ兩ナガラ考妣ヲ追慕シ動スレバ風樹ノ感ヲ發シ朝夕考妣ノ木主ヲ禮スルコト十餘年一日ノ如シ』とあるが風樹の感の切なる所先生亦能く似て居られる先生嘗て語られるに『自分若い時よく鳥打に出掛けたのは獲物の少しも携へ歸れば父が非常に喜ぶからであつたが父がなくなつて後は喜んで呉れるものがないので獵は全く止めた』と語り畢つて暗涙を催された其外御兩親追慕の談話は幾度も承つたのである。先生が家庭にあつて情愛厚く家庭が和氣暖々たりし事は固より余が喋々を待たない先生は平素論語の中に在る孔子の辭で『老者安之朋友信之少者懷之』と言ふを非常に味つて居られ又『世の中は情七分義三分のかね合で行くこと肝要』と言はれたこともある此等を併せ考へれば先生が平生自ら注意された所が那邊に在るかが分ると思ふ。

今一つ先生の美點は人の善に推服される事である假令自分とは思想や行き方を異にする人であつても人格が高いか行爲が殊勝とか見られる時は稱讚の辭を惜まれない一例を擧ぐれば新島襄氏の如きが其れであつて其他これに類することは少くない。

細事であるが今一つ附加へ度い事は先生がよく物事を整頓される事である。濟々爨内居住の時は机上の書物なり手紙なり夫れ夫れ整頓し又居間の押入には一棹の箆筒があつて羽織袴衣裳等皆綺麗にたゞみ夫れに出し入れされるのが日常の事であつた。後年先生の喪を聞いて余も葬式に参列の爲に上京したが通夜の翌日不圖先生の書齋に入ると矢張りきちんと整頓されて居て文書なども小さい小箆筒に一々札を張つて分類して納めてあるのを見て坐ろに懷舊の情を起したのである。

### 一、先生の容貌言語態度

余が始めて先生を見たのは先生二十八歳の時であつた其頃先生の風采は骨格大きく長け高きが瘦せ地で容貌は面長で顴骨秀で顴肉落ち鬚髯戟張顔色は稍蒼白眼光は爛々であつたが三十四五歳以上の先生の風采は餘程變つた其頃からは頗る肥滿され威容の中に一段の温和を加へて來た藤田東湖は長岡是容を評して『温潤の中雄虎の相あり』と言つたが此評語は移して先生の容貌に適用したい實に堂々たる風采である。言語は

音聲澄みて遠きに徹し非常に明晰で其演説は莊重にして順序正しく然かも極めて眞摯言々人を動かし島田三郎の様な快辯ではないが確に雄辯家であつた然し議政壇上では其演説を聴くこと甚少かつた爲世人が『三年鳴かず飛ばす』など冷評を加へた事もあつたが一度豫算委員會で演説された時は論旨と言ひ辯舌と言ひ態度と言ひ如何にも上出來で敵も味方も鳴りを静めて殆咳一つするものも無く傾聴したと云ふので清浦奎堂先生は書狀を贈て稱讚したと言ふ噂もある又座談は一層長所で莊重な辯の中に時々諧謔を交へ傾聴して居る中に抱腹絶倒させ述べ去り述べ來り何時迄も人を飽かしめる事がない。態度は極めて沈重温雅で或雜誌記者が先生を評して『其舉動は安詳恭敬』と言つたが適評と言へよう。對坐して居ると春風の中に坐すると云ふ氣持がする。先生又能く人を魅する力があつて人が輿に談話して居る間に何時とはなしに引附けられて自然に敬慕の念を生ずるのである。



### 三、先生の政治的生涯

克堂先生が池部先生を輔けて熊本隊を作つて西郷南洲に與みし西南戦争に参加せられた事の顛末は先生の自著戰袍日記があるから此に述べる必要はない其後紫溟會を創立し次で國權黨を組織し進んで中央政界に出ては國民協會を創立し更に進んで帝國黨を組織し之を擴張して大同俱樂部を作られた事の経緯又井上の條約改正續いて大隈の條約改正に反對運動を起して其運動の中心勢力となられた事其他對外硬論を唱へ或は對支政策の問題を提けて奔走された事などについては外に適當な語る人があるから余は差控へることにする唯先生の生涯を一貫した逆境と其逆境を一貫した先生の精神とに就ては政治には門外漢たる余も一言するを禁じ得ないのである。先生が西郷南洲に與し西南戦争に参加された時は非常な抱負を以て起られたのであつたが遺憾ながら其は失敗に歸した抑此が逆境の始まりで紫溟會の創立國權黨の組織も天下の大勢に反抗して起れたから矢張逆境である先生の詩に『少小元期擴斯文愧我四十尙無聞風塵閱盡

春秋老道義講來夙夜勤身後功名存竹帛眼前窮達本浮雲得將隻手回天日不問登壇第一勳』と言ふのがある先生は其當時狂瀾怒濤の如く殆んど全國を一掃せんとする矯激な自由民權論に反抗して皇室中心主義を提げ又國權擴張を唱へ眇たる一小黨を率ゐて九州の一隅から起り天下の頽勢を挽回せんとされたのは眞に隻手を振ふの有様で楠氏が金剛山に立籠り菊池氏が九州で義を唱へたと同様である其れで先生の境遇は非常な逆境であるが眼前の功名富貴利害窮達など言ふ念は毛頭先生の心中に介在して居ないことは實に此詩の通りだ其後時運が轉變して先生平素の志は幾分達せられた様に見えるけれども先生自身に取つては何等世間より其孤忠をすら認められないので逆境は益々甚しかつた。先生の政治的生涯で順境と思ふのは非條約改正運動の時と日清戦争を中心とする其前後僅の間に過ぎない日清戦争前後は少數黨を提げながらも或は舉國一致を唱へて多數黨を引すり或はキャスティングボートを握つて朝野兩黨の權衡を執らんとし其勢力旭日昇天の様に見えた而も其れは束の間晚年大同俱樂部が出来て稍前途を打開されたが偶病魔に襲はれて僅に五十三歳の短命で政治的生涯の幕を閉じ生涯を逆境で

終始された然し其政治主義は一貫して變へられない毎經一艱一倍來と雲井龍雄が歌つた如くに逆境の程度が加はれば加はる程益其本領を發揮された先生の如きは眞に天下の廣居に立ち天下の大道を行ひ富貴も滌する能はず貧賤も移す能ざる大丈夫である徳富蘇峰氏は嘗て先生を目して天下の士と言つて居るが適評と言へよう。先生が若し逆境から身を起さずして其當時の潮流に棹して板垣の自由黨に入るか或は大隈の改進黨に投せられたらばそして長命であつたら一度は必ず總理大臣と爲られる機會が來たと思ふ先生の友人廣瀨千磨なども『佐々は總理の器』と言つて居るが廟堂の上に立ちて其經綸を實施する機會が遂に先生に來なかつたのは痛惜に堪へない。

先生が未だ濟々疊に居られた時文部大臣森有禮は先生を抜て文部省に入れ様とした先生は言下に日本外史に在る源爲朝が藏人の任官を謝絶した辭を引て『吾は鎮西八郎にして可なり』と言て森の懇請を謝絶されたが先生の政治的生涯も矢張鎮西八郎で推進されたのである。

明治三十五年余は校用で東京へ出張した節先生を富士見町の邸に訪問した其時先生談話の餘『自分は孤忠を抱いて長い間國家に盡したが世間では些も我孤忠を認めない』と語り稍感慨の面持をされた余は前の先生が四十歳の時の詩を擧げて先生の本領は此に在りと慰めて其詩の揮毫を乞ふた其詩は今掛軸となし時々床掛け先生を偲んで居る。

\* \* \* \* \*

先生逝去の報知に接した時余は直に上京して葬式に參列した其時知人間に叙位申請の噂あるを聞いて不賛成を唱へたが已に申請後で遺憾に堪へなかつた然し幸か不幸か申請の目的は達し得なかつた又一昨年御大典に際し時の熊本市長は先生の贈位申請につき余の意見を徴したが余は賛成しなかつた。余は申請して肩書を附けるのは別に先生の重を加へる譯ではないと思ふて居る。

## 四、先生の學風と文藻

先生は學者を以て自ら居らず少年子弟に對してすら『自分も君達丈の學力があれば』など言はれる事はよくあつたが其實は學殖も淺くはなかつた。先生は始め時習館に入つて居寮生となり後國友昌氏に従つて學ばれたが宋學は意に滿たなかつた特に時習館の學風は不滿であつた後に水戸の學風を慕ひ水戸の人物では藤田東湖を景慕されたが學問の上では東湖の父藤田幽谷を最推重して居られた幽谷の門人會澤安が幽谷の學風を述べた及門遺範といふ本がある先生が濟々費に居られた頃は何時も座右に其本が在つた位で先生の學風は及門遺範其儘と言つてもよいと思ふ。先生は亦明の王陽明を尊崇して居られた但し先生が尊崇されたのは其學說よりも寧ろ其人物であつて陽明が死地を蹈んで自ら練磨し難局に處して精神が益安定した所を味うて居られた様である。先生はまた林櫻園先生に就て國學を學ばれた然し濟々費に居て生徒相手の談話に引用さるゝ文句及び其例は概して漢文からであつた。

先生は文才も亦豊であつた著書としては硝雲彈雨一斑硝雲彈雨文稿同詩草戰袍日記濟々費歴史觀風詩史がある。先生には和歌も出来る然し漢詩の方が長所であつた先生の作詩に就ては先生嘗て自ら語つて居られた『自分少年の時は作詩などの考は無つたが友人の田中之雄(白東)が勧めるまゝ彼が指導を受けて始めて作詩を學んだ後西南戰爭に参加し次で幽囚の身となつたが拙作ながら感慨の一端をも述べる事が出来て大に獄中の無聊を慰めた此れ確に田中の賜である』と。先生の詩は流暢で秀麗徳富蘇峰氏は嘗て國民新聞紙上に觀風詩史を評して中には専門作家の集中に入れても慚ない者がある」と稱揚した詩史は先生が歐山米水の門に吟咏された詩集である。戰袍日記は硝雲彈雨日記を増補して詩草を其中に織込んだ者で文章の妙詩の秀事實の壯烈相俟つて面白い著作である。硝雲彈雨文稿は重に西南戰役前後に亘つて作られた漢文集で皆立派な漢文である。先生は斯く學才文才兩ながら人に卓越して居られたから政治家としてでなく單に學者として或は文人として立れたとしても立派に一代に名を成されたであらう。

先生は又能書である高橋長秋翁の話によれば先生は幼少の時已に能筆で知られて居た八九歳の頃董其昌の書を學び其法帖を雙鈎填墨されたものが實に見事に出来て居ると言ふ。先生の書風は年齢に依り變遷して居る二十八九歳の頃の書は長三洲の書風から得來つたものに山陽や蘇東坡の書風を加味した様に見える清佛戰爭の後先生は支那視察に往き歸られて後は書風が著しく變化して清朝風を帯びて來たその後度々書風が少しづつ變つて時としては頗る洒落な書も出來た晩年は又書風を變へることに頗る苦心をされたが熟する迄には至らなかつた。若し長壽を保たれたらば書風も一層圓熟して一家をなされたかと思ふ。先生の書は大字も立派であるが細字も甚だ綺麗である殊に書翰は最見事である木戸松菊と同様人に代筆させる事は嫌であつたと思ふ唯晩年の書翰には深水清君の代筆を稀に見受けた。

## 五、先生の教育事業

克堂先生の生涯中で一半の力を注がれたのは教育事業であるが其中で第一に指を屈すべきは濟々齋の創立である同齋の創立及經營に就いては先生自ら筆を執つて書かれた歴史があるから深く之に立入ることは止めるが唯其經營に就ての先生の苦心の一端は此に一言する事を禁じ得ないのである。

維新以來朝野舉つて歐米の文物に心酔し政治法律専ら歐米の制度に倣ふのみならず教育に於ても歐米の思想を其儘採用し我國を歐米化する事に熱中し忠孝仁義の彝倫道德は殆んど國民の念頭に上らず偶之を口にする者あれば迂遠にして時勢を知らざる者として嘲笑する有様であつたので克堂先生は我國の前途につき大に憂慮された。明治十七年の春或日先生は余に向つて自身の著書「維新後の日本史」を取り出し明治五年の太政官布告學事獎勵に關する被仰書を指して明治政府文教の方針が此の通りであるから我國の前途寒心に堪へないと慨嘆された事は今猶記憶に新なる所であるそれで先生が濟々齋を創立された趣旨は政治の方面で紫溟會を起されたのと根抵に於ては同様の意義を持つたので教育の方面よりしては忠孝無二を主義とする水戸學を根幹として國躰の尊嚴を闡明し（所謂大義を明にし）て人心を正し皇基を擁護せんとされるので

あるから先生の教育的立場は當時世上の風潮と逆行するのみならず明治政府の文教方針にも反對して居るので濟々疊は其當時の社會からは概して悪感を以て待たれた。第一社會の壓迫官憲の壓迫又熊本出身の諸先輩の壓迫さへあつた一例を言へば或時在東京本縣出身先輩諸氏協議の結果當時の男爵米田虎雄氏が打手の大將(米田氏自身の詞)として濟々疊撲滅の爲下縣する事迄内定して居た位であつた尤も此の事は時の文部大臣森有禮氏來縣視察後先輩の濟々疊に對する態度が全然變化した爲に果されなかつたが先生の談話一たび此事に及ぶ時は自然と語調に熱が加はつて來ることを今猶記憶して居る。此の如き状態であるから先生の苦心は尋常でなかつた。明治十九年森氏が熊本に來て濟々疊を參觀する時など先生は一大決心をして迎へられた。一躰其頃迄の森氏は極端な歐米心酔者として知られて居たから同氏の視察の結果或は正面から非難を浴せ萬一は廢校を命するなど騒出すかも知れないと先生は考へられ所謂背水の陣を布いて森氏が若し濟々疊の教育主義と反對な主張を振翳せば此方も堂々と平素の主張を述べ其の教育意見を反駁して一大激論を試みようと思つて居られた所が森氏は參觀

を畢つて『自分は此れまで幾多の學校を參觀して何日も失望して居たが今度初めて學校らしき學校を見た』と言つて大に喜んだので先生は事全く意外に出て此れが機縁となつて先生は森氏と意氣相投せられた。森氏は巡視を畢つて東京に歸り明治天皇に拜謁して濟々疊の事を奏上したが其事は森有禮の傳中に引用された井上毅先生の講演の中にも載つて居る。此れより濟々疊の名聲一朝にして高く校運は始めて順調に向つた其外濟々疊經營につき先生種々苦心の事蹟は一々茲で述べないが佐々家には其事に關した記録があると思ふ余も先生自ら執筆された記録を佐々家に贈つた事がある。

先生は學科の授業をされなかつた尤一時は三級の日本政記を受持たれたが其後は嘗てなかつた又疊内に起臥して居られたけれども外部との關係が多いため教員室の勤務時間は割合に少く朝早く外出して夕刻歸疊されることも稀ではなかつた然し校内に於ける先生の居間は一種の特別教室たる觀を呈して居て先生の松下村塾とも言へるのである先生の居間は六疊ばかりの部屋で其部屋に机を一脚置き其横に書物箱を二つ三つ並べ其處で本も讀み手紙も認め人の依頼に應じて揮毫もし生徒の引見も來客の接待も

一切此一間でやつて居られた。先生の居られる時は晝となく夜となく生徒が澤山推掛けて行く先生は外から歸つて衣服を更へられる間も晩食の間も生徒相手に談話される教訓もさるれば諧謔も言はれ大抵毎日夜殆缺したこと無く時には夜十二時にも及ぶことがあつた。斯くして先生は其間によく生徒の個性を觀察し其長短を審にし其れ其れ適當に指導して行かれる。平素先生の貴ばれたのは今日の所謂適性教育であるから先生は徳川時代の儒者では活きた教育をする學者として木下順庵を推重して居られた。

順庵門下多士濟々であるが順庵は能く其個性を察知し新井白石室鳩巢雨森芳洲祇園南海等皆其れ其れ其長所を導き其材をなさしめた事は先生が常に口にされる所であつたそれで生徒が先生に歸服し景慕して居つたことは實に大したものである先生が上京か若くは支那旅行などで不在の時は學校生徒の缺席が非常に増加し綱紀が直に弛んで來るが先生が歸つて來られると直に引締つて出席の數が著しく増加する此れは余等生徒の目にも直に映じて居た。一度先生が長岡護美公に隨行東京から歸られたことがある丁度其時余は學校の裏門の側に在る寄宿舎に居て窓側で友人と雑話して居た午後之二

時頃であつたと思ふ先生がヘルメット型の夏帽を蒙り裏門から入つて來られる姿が見えると隣の室に居た一人の生徒が起つて『佐々先生が歸られた』と大聲に叫んでかけ出した無論余等兩人も直に起つたが聲を聞くや否階下に居る者も階上の者も全校一齊に起つて駈出し玄關前に出て迎へ大喜びした余と一處に起つた友人が其光景を見て『我々も此れ位に人の心服を受くるやうになればもう其れで宜い』と感嘆したが無論余も同感と言つた。

先生は濟々費の創立者であるが幹事と言ふ名稱で事に當つて居られ俸給は僅に拾貳圓であつた校長には飯田熊太(先生母方の叔父)と言ふ老先生を推戴し副校長には古莊嘉門先生を推戴してあつたが實際の仕事は先生が殆全責任を以て當られた名實共に校長となられたのは先生が學校をやめられる前僅の時期であつた。

居室は始めは教員室の後にある六疊ばかりの間であつたが後には八疊と三疊ばかりの古家を引いて學校の一隅に建て其家に移り三疊の方には生徒(二人斗り)を置き八疊の方を自分の居間として居られ食事は生徒と同様であつた。此居間はよき記念

物であるが保存されなかつた事を今にも惜しく思ふのである。

\* \* \* \*

先生は女子教育にも手を着けられた今の尙綱女學校は元濟々疊の女子部と言つて先生に因つて創立されたものであるが先生は餘程前から女學校設立の考を抱いて居られた或る時先生談話の際吉田松陰に論及されて『松陰は實に卓識である其當時已に女子教育の必要を論じて居る』と机上に在つた松陰の著書講孟劄記、武教講録を取つて余に示し自分も追つては女子の學校を作る考だと言はれた此の談話は月日はよく記憶しないが明治十六年の秋であつたと思ふ後果して女子部が出来た先生當時女學校組織の事を語り『淺山(知定先生)が其任に當りたいと言つたが女子教育は君よりも内藤(儀十郎先生)が適任と言つて内藤にやらせる事にしたと言はれた事もあつた。

\* \* \* \*

先生は又早くから將來東洋の多事なるを察し朝鮮支那に注目し同心學舎の時には朝鮮語科を置き濟々疊となつては支那語科を置き其方面に於て活動する志士を教育され

た其邊の消息は井手佐野緒方君等が談ずる事と思ふから余は控へることにする。

今一つ先生には教育上の事業がある其は肥後獎學會の創立である肥後獎學會が成立を見る迄には幾多の過程を経たが一番の發頭人は克堂先生と津田先生である。克堂先生は當初熊本教育會として創立し山口縣の長防教育會と同様の働をしようと思ふ案であつたが津田先生の意見によつて肥後獎學會と言ふ名になつて意義も少く違つて來た最初立案の時は克堂先生自ら筆を執られ其れに參加したのは井芹經平君と余であつた案文は先生から余受取り今猶保存して居る。

## 第二篇 克堂先生の訓育一斑

二六

### 一、濟々覺入學前の余が修學狀況

『少年高科に登るは一の不幸なり』とは程伊川の言であるが余も其れに似寄つた不幸を享受して生長した者である。余は市内建部に生れ其處で生長したから黒髮小學校に入つて教育を受くべきであつた然し同小學校の出來た頃は他の兒童と机を並べて學ぶことの出來ない状態になつて居たから就學は免除された。其後葺の内中學校へも一度入學したが其れも直に退學したので正式に完全な學校教育を受くべき機會は皆失つて居た若し濟々覺に入學しないでそして克堂先生の知遇を受けないで居たらば余は如何なる經路をたどつて生活した歟今日之を思へば實に心を寒くする。先生は余に取つて全く救主である。それで先生から受けた薰化を述ぶるに就ては先づ濟々覺入學前の修學過程を少しく語る必要がある。

時習館廢止の後建部郷黨の子弟も修學の途を失つたので長老相謀つて明治六年一軒の家を借り學問所を設け「教館」と名けた。余が其處へ入つて若い郷先生についたのは丁度八歳の時である先づ句讀から始め拾歳の時は白文で左氏傳を讀み得る位の學力は出來て非常に興味を覺え進修の念燃るが如くなつた其時郷先生は俄に他に轉して後任の先生が見えたが前の先生とは學力雲泥の差があるので不滿に堪へない遂に出席を止めて仕舞つた抑も此れが不幸に踏み出した第一歩である。兎や角して居る中に佐野亥一郎先生に就て教を受ける事になつたが是も一時で明治十年西南戰役が起り一家擧つて近在に避難して學事は全く荒廢した薩軍が引揚げて自宅に歸つた後も佐野先生は已に他界され附近には就て學ぶべき先生もなし悠々として何等の緊張なく日を送り丁度十年の春から十五年の秋濟々覺に入學迄六ヶ年餘少年時代最も大事な修學時期は余が生涯中の沙漠通行時代であつた。此間處々綠地を發見した様に斷續常なく僅な期間づつ師に就たのは辛島(格)木村(弦雄)栃原(知定)三先生のみで其他は自宅で獨習したばかり。父は醫者で少しは漢學に通じて居たが業務多忙で十分指導の機會がない其上明治十二年以後は病魔に侵され三ヶ年間は一年三分の一は床就きで余は其間着病を主と



し父が氣分のよい時を見て其の指導を受くる丈で自宅修業の方法としては經、史、子集を雜讀涉獵したに過ぎないそんな境遇だから子供心にも前途の暗黒を感じて居た。

此間にも余に取つて一の難問題が横つて居たそれは家業の問題である。父が長い間余に不得要領の生活をさせたのも畢竟時機を見計つて余を醫學學校に入れる考であつたからと思はれる然し余は醫者が大嫌であつたので問題は解決せず推移つて居たが明治十四年の冬になつて父は漸く余が懇請を納れ家業の不繼續を許可して呉れた其れで長い間の苦心は除かれたものゝ前途の暗黒は何等變りない此頃から余も次第にあせり出して來た。其の内に濟々疊の噂も色々耳に入つて來て入學の念薦りに動き父に其事を申出すと今度は容易に許可しない或る日外から歸つて來て『彼の學校は佐々が今一度謀反するための準備に作つた學校だと風評もする入學は斷念せよ』と言ふ然し余は斷念しかねて親類や友人などの意見を聞いて廻はり再び父に持出して懇願した父は己を得ないと言ふ面持で然らば聽講生で一二科出席せよと言ふ余は其れでも仕方ないと考へ早速姉婿宇野七郎を保證人として願書を提出したのは明治十五年九月初めであつ

た。指定された日に出頭して二級(當時の最上級)の試験を受けた試験した人は沈重な老先生で此れぞ時の校長飯田熊太先生であつたと後に至つて知つた。

試験が無事通つた翌日姉婿の宇野(當時の紫溟新報後の九州日日新聞社の社員)が來て『佐々が態々社に來て濟々疊に一才子を得たと喜んで居る』と言つた余は始めて知己に遇つたと言ふ氣持で非常に感激した此れが克堂先生に對して景慕の念を發した最初で此れから前途に光明を認めることが出來て生活の一轉折に入つた。

## 二、入學及び疊風

翌日昇疊して克堂先生に御禮を述べ選んだ課業に出席することとなつた。其れより二週間ばかり選修科目の授業日のみに出席して居る内に疊風の長所も次第に分り本科生となつて日々出席したい念が薦に湧いて來た。遂に再び父に學校の狀況を語り本科生になりたいと申出た父も學校の狀況が分つて安心した様子で又自分の熱心をも知り今度は異議なく許可したから學校に願出ると是れ又直に許可されたので一ヶ月たゝぬ

中に到頭本科生となつて仕舞つた。學校は非常に自由で繁瑣なことが少しもない生徒は開豁で何等屈托した様子がなく意氣軒昂であるが又親しみ易い。家庭にのみ生息して居つた余は池の魚が江湖に放たれたと同様俄に天地の濶きを感じて愉快に堪へなかつた。孟子に『始めて之を舍けば罔々焉たり少くあつて洋々焉たり悠然として逝く』とあるが余は眞に其通であつた。但し豊風の長所の半面には粗豪自ら喜ぶ短所も發揮されて居たので余も悠然として逝いた結果は矢張逝き過ぎもした尤も豪ならんと欲したけれども豪にはなれなかつたが唯粗放の風が漸々出來て遂には課業は等閒に附して好な本を耽讀する様なことにもなつた。

豊風の發露で外貌にも生徒に一種の風があつた袴の着様歩き方姿勢語調吟詩迄特有の型があつた。總括的に言へば昂然濶歩の風姿で■■何人でも一見他學校生徒と識別の出來る様であつた余も何日とはなしに其れに同化した。此等外貌にも克堂先生は注意して居られた或時余は先生に侍坐し手を合せて兩膝の間に置きながら談じて居ると先生『對坐の時手を合せて膝の間に置くのは卑屈に見える左右各々手の平を兩股の附

け根にあてて此の通りにして居るがいい』と自分で型を示し『西南戦争の時薩軍の將士が臂を張出し横柄な風をして居るのに熊本隊の將士はもみ手をする様な格好で對話するから如何にも卑屈に見えて不愉快であつた姿勢は熊本人よりも佐賀人が優つて居る』と語られた又一度は『君か歩く時の姿勢は少しく前に屈んで居る卑屈に見える又屈む人は病身になり易い體を伸ばして前方を直視して歩くがいい』と注意された余は教に従つて努めて矯正したが其後二十九年を経て米國のギューリックと言ふ醫者の書いた衛生の書を読み脊柱を正しくするが健康上最も必要と述べてあるのを見て懷舊感謝の情に堪へなかつた。

豊風の淵源に就て少しく説明して置きたい先生は舊藩時代に於ける熊本の上風に就ては賛否相半である其の詳細は先生自ら書かれた『熊本人士に謀るの書』に譲つて此には述べない唯一言指摘したきは土風の長所も短所も藩の學校教育に負ふ所が多いとの見解である。先生は維新前に於ける熊本の藩論に此の短所が發揮されて因循姑息の政策となり薩長に立ち後れた事を青年の時に目撃して遺憾に思はれ又自身で同志と提携

驅馳して其の短所の發揮を體驗して非常に伎癢を感せられたから之を矯正する念願は  
 何人よりも痛切であつた。濟々疊を創立されたのは倫理を正うし大義を明にし皇基を  
 擁護するが根本の理想たる事勿論であるが一は藩學が興へた流風の美點は之を保存す  
 るも弊風は之を革新する意義を包含して居られた余か在學の日先生に侍坐して居ると  
 談話學校の事に及んで先生「濟々疊は時習館の再興を以て任して居るが其の學風の美  
 點は之を繼紹するも缺點は之を受けつがぬ様にした」と語り細に其の缺點を列舉して  
 後論語の『中行を得て之に與みせずんば必ずや狂狷乎と言ふ語と郷愿は徳の賊なり』  
 と云ふ語を引き中行の士は得がたい此は寧ろ異數と考へなければならぬ青年の教育は  
 狂狷を目標とするが肝要である『中人以下以下を語るべからず』と言ふではないか  
 總ての青年に向つて中行の士たれと望めば却つて郷原を養成する時習館教育の缺點は  
 其處にあるそれだから熊本には郷原が輩出した藤田東湖などは流石に違つて居る弘道  
 館學則に『中行の士誠に貴ぶべく狂狷亦聖人の興みする所斐然として章を成す進取の  
 益亦多し闒然世に媚び誤つて郷原の人となる勿れ』と掲げて水戸人士養成の目標を示  
 に此に宣明する。

して居る時習館の先生達は東湖程の識見がなかつた」と語つて慨嘆し濟々疊教育も矢  
 張り此の水戸流の考で狂狷を目標とする』と言はれた。余は非常な感激を以て先生の  
 談話を聞いた。濟々疊の疊風は先生の此の教育思想から胚胎して來たものなる事を特  
 に此に宣明する。

\* \* \* \* \*

濟々疊は世の風潮に反抗して起つたのであるから其反抗思想は生徒の間にも當初は  
 充滿して居た反抗思想の得失論は別として一體外部に對して反抗する思想が強けれ  
 ば全部に於て生徒の思想に一脈の緊張を惹起する國家にしても臥薪嘗膽の時は士氣  
 が振ふ之に反して世の風潮に順應する事を貴ぶ様になれば自然と緊張味は失はるる  
 其點は國家も學校も同様と思ふ。

\* \* \* \* \*

克堂先生の訓育狀況を知る參考として濟々疊上古史時代の變遷に就き此に少しく述  
 べる。

濟々費は創立當初は私塾の風を多量に持て居た學風も非常に自由で一例を言へば數學の如き正課中の科目なるも上級に於ては殆隨意科の形で出席する人は稀であつた尤も卒業證書を貰ふには數學試験の通過を必要とする規定はあつたが試験は生徒便宜の時に受くる事が出来て思ひ思ひであつた。次に師弟の間は非常に親しみが深かつた克堂先生と生徒の間は申すに及ばず他の先生と生徒の間も略同様であつた舎監即ち當時の寮監の如きは師弟の中間に居る様な觀を呈して居た然るに余が在學中學校としての形式が漸次整頓して往つたが寮監の地位が又次第に高まつて後年には訓育の中樞となつた時代が來た様である克堂先生が名實とも費長となられた頃は基本金が出來て維持法も立ち學則其他諸般の改革があり體形も略定まり學校の名聲全國に響き上古史代に於ける濟々費最盛の時代が來たのである先生が費長を辭められたのは明治二十一年であるが其後濟々費は内外種々の事情に餘儀なくされ二十三年頃は衰頹の極に達し局面打開の必要が感せられるに至つた二十四年夏余は東京より歸省の序に時の費長木村先生を訪問したが先生は學校の現状につき種々の苦衷を述

べ私の胸中は此の通りと手を以て胸の邊を搔き廻された其沈痛なる面持は今猶忘れないのである前九州學院が創立さるる時濟々費が合同に参加した原因は此に在るかと思ふ當時克堂先生は政界間散の爲に熊本に歸つて居られた余は先生を訪問して始めて諸私立學校合同計畫進行中で濟々費も普通學部と改稱して之に参加決定の事を承知した余は驚愕して濟々費の名稱を棄つることは痛惜に堪へない保存の方法はないかと嘆息した處先生笑つて『名稱を惜むの情から云へば我輩が君よりは幾倍強いかも知れない然し今は大局の上から達觀せねばならぬ合同は已に決定したが未だ發表する迄には進んで居ない君は其を含んで居よ就ては君に頼む事がある君が東京に歸つた後程經て此事が新聞に發表された時在京同窓生中君と同様な考を持つ者が在つた場合は能く我輩の苦衷を談して貰ひたい』と余は承服したが名稱變更を惜むの念は猶胸中に介在した克堂先生も大局論は唱へられたが實際は名稱變更には餘程苦痛を感せられたと察した三十三年濟々費が純粹縣立となる時余が濟々費の名稱を其儘保存する事を固く主張したのは此の時の刺撃が一の原因であつた。

## 二、克堂先生の上洛見送り

本科生となつて日々通學しても當分の間は克堂先生に親炙することはなかつた。全生徒を集めて訓話される時は無論參列拜聽して其度に感激した然し未だ相對で談話拜聽の機會は無かつた。十月上旬であつたと記憶する或日午後生徒が何等か動搖して右往左往する、中には駈けて門を出る者もある、其中續々出て行く。新參の余には薩張り譯が分らない近邊に居つた生徒の一人を捉へて様子を聞くと佐々先生が京都の帝政黨大會の爲今日出發さるるそれで皆百貫迄見送りするのだと言ふ、では『自分も往かう』と跟いて出掛けた。先生の影は見えぬ生徒は三々五々急ぐものもあれば徐行する者もあつて思ひ思ひである。余は高野邊田を行つて居ると後から先生が聲を掛けらるる驚いて振り向くと暫く一所に話して行かうと言はれ學問文章の談で問ふたり答へたりして一二町行つた所で先生は少し急いで行き越された。余は先生の話が面白く浸み浸み有難く感じた百貫に着いた時は生徒は已に多數川邊に集つて居つた。其頃は京阪

地方に行くにも未だ汽車はないから旅客は百貫から汽船で行くのである先生の姿は暫く見えなかつたが廳出て川端に來られると生徒は銘々前に出で一禮して還つて行く余も其通にして他の一人と一所に還りかけると先生後から余を呼び返される何事かと思ひ近づいて行くと自身被り居られた麥藁帽子を脱いで余に渡し『自分は別な帽子を被つて行くから此れは君持ち還つて自分が部屋の上の机の上に置いて呉れよ』と言はれた余は恭しく其帽子を取つて又一禮して別れたが特に先生から認められた様な感激を覺えた帽子は持ち歸り鄭重に先生の机上に置いたが先生の歸り迄は其帽子が異狀なく机上にあるかどうか時々窺ひ見に往つた此れ余が先生景慕の第二步である。

## 四、入舎……遠足と克堂先生點化の一斑

濟々疊には留通學と言ふ寄宿通學を混ぜ合せた制度があつた此れは疊内學寮に起臥しながら食事は自宅であることを許された制度である三度の食皆自宅で取るものもあれば晚食丈けに歸るもある學校と自宅の距離の遠近により違ひ銘々の勝手である。無

論純粹の寄宿生も居るが此留通學があるために寄宿生の數が非常に多く全校生徒の大部分を占めて居た而かも重立つ上級生は皆寄宿生である通學生は少數で肩身が頗る狭い。元來克堂先生の教育は特に重きを寄宿舎に置かれたので寄宿舎が殆學校全躰の觀をなして居つた。

余は本校生徒となり日々通學して此狀況を目撃しては矢張肩身の廣い生活がしたい其上克堂先生の風評を聞いて居ると『豪傑である』『大人物である』など日々耳に入る又先生の談話は非常に面白いと寄宿生からは聞かされる肩身の廣い生活はしたし豪傑に親炙の機會も得たし余も寄宿の念が湧いた然し父に侍養を缺いでは濟まぬと一旦は躊躇したが思ひ切つて申出て見た。案外にも父は快く承諾して寧ろ獎勵した『今まで膝下にのみ置たが年齢から言つても人に採まれた方がいひ幸ひ自分も今は元氣だし寄宿して差支ない留通學もいひが必しも毎日歸らなくてもいい時の都合にせよ』と言ふので余も大喜びして父には當分侍養の缺けるのを陳謝し學校には寄宿を願出た此れ亦直に許可され九月入學後三ヶ月未滿で余は留通學生とまでなつて仕舞つた。

入舎後暫くすると學校で八代日返り遠足が舉行された遠足の方法が少し今とは違ふからくどくどしいけれど一通り述べよう。八代日返りといへば近道を行つても二十里に餘るので以前から青年の間には壯舉とされて居る余も參加を申出た校長の飯田先生は余が行く事を聞かれ『彼の身躰では無理だ』と心配され寮監に注意があつたさうで行かぬでもよいと傳へられた成程余は上級生中では一番身躰が薄弱であつた然し負けぬ氣もあり又新に鬢風の刺激も受けた時であるから注意を受けたに拘らず振つて參加した目的は八代妙見祭を見る事で時は十一月某日氣候は稍寒い出發は午後の七時か八時頃であつたと記憶する。點呼もない號令の聲も聞かぬ噪いで鬢門を出た服装は殆皆和服帽子は被つて居ない無論二三の例外はあつた毛布を頭より被つた者も少ない履物は木履日和下駄草鞋まぢまぢである。行列もしない三々五々話しながら暗を縫ふて行く。遠方に笑聲が起り吟詩の聲も聞え時々炬火が見えて一行の人影の浮ぶ光影も面白い余も二三人と話しながら行つて居ると川尻附近で克堂先生余の名を呼ばれた始めて先生の行かれる事を知つた色々話しながら行かれる談が學問上の事になつて先生は宋

學の缺點を擧げて談される余も父の影響を受け其頃は物徂徠の崇拜者であつたから宋學攻撃に調子を合はせ『禮樂卽道』の徂徠の説を擧げて『卓見である』と言つた先生『成程徂徠は曠世の學者であるが彼れが養成した人物は浮文虚辭の徒ばかりあれではつまらぬ其上』徂徠の門には斯馳の士多し』と言ふではないか雨森芳洲が其子を徂徠の塾から呼び返へしたのは當然な事で人の子を託する人物ではない』と言はれる余は大宰純は如何と問ふた先生大宰は子子たる小丈夫の様だと貶して更に自分は徳川時代の儒者では木下順庵を推したい順庵は其才の長する所に従つて一々門下生を導いた。其れで型が一樣でない。して皆天下有用の材となつたと新井白石以下を列擧し『成徳達材』と言ふが其長する所に従つて大成するが達材ではないかと言はれた余は先生と談じ乍ら行く事丈でも光榮と思ふ上に談が面白く有益であるので終始謹聽し時々感激の辭を以て應答して行く中四五丁も過ぎた。先生は談が畢つてから行き越された。後で流石に先生の着眼は違つて居ると感じ景慕の情は更に深くなつた。

王陽明年譜に『陽明先生同志を點化するに多くは之を山水登遊の間に得たり』とあ

る。克堂先生も度々此語を擧示して陽明を談せられた事がある。余が百貫迄見送した時又此遠足の時に態々呼びかけて談話されたのは矢張陽明が點化の方法で余が新參であるから特に注意を賜つた者と後に至つて感じたのである。

さて話は元に返へり余は一行と後になり先になつて行く中次第に夜は更けて來る睡氣もさし來る睡つて躓く人も少くない到頭一人は睡り倒れて傍の井手にはまつた人々は集つて引き上げる焚火をして衣をあぶるなど騒ぎやら滑稽やらあつて漸く夜明けの後八代に着いた。其れから先生の知人下村氏へ行き搏飯で朝食を濟ませ妙見社參拜に出掛けたちよん留の奴が妙な格好で槍を投げ遣り又投げ返し行くのと相並んで行き神社に參詣した。神社附近で寛り見物し色々な物も見たが睡さと疲勞で何を見たか薩張り記憶がない。三時頃歸りかかつたが克堂先生の姿が見えぬ聞けば用事があつて八代に残られ宇野(東風君)寮監の引率で歸るとの事であつた歸りは槍の柄の近道を取つたが槍の柄一本の長さが十里もある様に感じ疲勞甚し但し余一人のみでない皆無言で行く。前には宇野寮監の腰に縋つて行く者も見受けた寮監の激勵の聲が時々聞える。松

橋に着いたのは何時であつたか疲れて記憶にない蕎麥屋に集つて蕎麥を食ひ元氣を附けたが余は最早疲勞に堪へないので許可を得て松橋に宿泊し翌朝歸つた。一行も全部歸り着いた時は已に夜が明けて居つたと後で聞いた。

槍の柄は直路を形容して附けた名で三折して居る一折を一本と言ふ

## 五、侍坐受教の始まり

克堂先生は書家である又生徒でも願へば書いて下さるとは生徒間でよく聞く話。八代遠足から歸つて後の事或日藤紙三枚を携へ先生に謁して一枚の揮毫を願つたが快く承諾された四五日立つと生徒の一人が『出來たから取りに來い』と先生の言を傳へた書齋に往くと直に渡された披いて見ると二枚には先生自作の詩五言律二首他の一枚には歐陽修の畫錦堂記中の數語を書いてある皆立派に出來て居る就中畫錦堂の記は余が平生愛誦し居つた文章であるから特に嬉しい大に感謝して引下り携へて家に歸り父に見せた父も英氣潑刺だと評して眺め入つて居る。此頃は父が克堂先生に對する不安は

なくなつたので成る可く親炙して教を受けよと言つた然し自分から進んで伺ふ事は控へて居た。

數日經て後余は寮内自分の席で本を讀んで居たら給仕が先生の言を傳へて來た『暇であれば談に來い』と早速先生の書齋に伺ふた。先づ余が家庭の狀況を問はれた余は代々醫業の事又廢止の事を答へた轉じて學問の話に移り先生の談話は時習館の學風齋藤境野兩先生の士風振興に及び幕末の談となり尊王討幕論肥後藩の態度幕府衰亡の原因王政復古大久保利通の遷都の議征韓論の破裂西南戰役と時代を追ふて進み要所要所で批評を加へ意見を參へ進んで西南戰役に於ける熊本兵火の慘狀を悲み特に城下士族の受けた打撃に對して大に痛心の意を表せられた先生は更に一轉して『但し兵火は實に悲惨ではあつたが一面から見れば利益もある矢張り禍は福の伏する所で其れは熊本を改革するに大なる助となることだ。第一兵火は熊本の士族平民の區別を焼き盡した此れが何よりも利益である兵火の爲に士族は家が焼かれ資産は亡くし四方に分散して勢力も無なつた若し何事なく士族が依然として城下に集團して居たら徒に士族を光らし



秩序ばかり八釜敷く困窮固陋の風は何日までも改むることは出来まい熊本は全く秩序倒れして仕舞ふ』と言はれる余は一寸辭をはさんで士族の肩書は全く無用のものなるかを問ふた先生は『全く無用だ福澤諭吉は願つて平民籍に入つたと聞いて居る自分は西南戦争で懲役となり平民となつた平民で少しも差支ない先祖の餘澤で門閥を誇つて居る者の十中八九は凡庸の徒である王公將相寧ろ種あらんやと陳涉が言つた通だ特に今の時勢では男子苟も志を立て爲さんと欲せば何事か成らざらんである木下先生（韃村）門下には多く俊材を出したがと指を折り數へて井上毅など身分は低いが少年志を立てた大上は徳を立て其次は功を立て其次は言を立つと言ふが井上は立言不朽を志した井上の詩があると先生低聲で梧桐の詩を吟じ聞かせ。『當此古今變遷際可缺立言第一流』と自ら任じて居たが彼は確に其志の通りにやつた。今の明治政府には餘人は兎も角一日も井上なくしては濟まぬ缺くべけんやだ立言不朽亦好いではないか王陽明も立志を第一として居る何事も立志が本である』と余は終始我を忘れて謹聽した謹聽して居る中に自分の識見が次第に高まる氣持がする談話が畢つた頃は自分の人物が以前よ

りはずつと大きくなつた様な氣がした同時に頭の頂きから足の爪先迄強い異常な緊張を感じた又今二三年も早くから先生に親炙の機會が得たかつたと思ふた。先生の談話は三時間以上に涉つた畢つてから深く禮を述べて引下つたが今迄は先生の景慕者であつたが最早崇拜者となつた。時は丁度十五年十二月學校冬休みの前であつた。

\* \* \*

余が家は數代前から本家から分れて居たが戸籍の上では一家族であつて父は家長ではない余は始めて十二三歳の時其事を知りなせ分家して家名を正さないかを問ふた。『分家すれば平民籍に落ちねばならぬ』と父が答へる其當時士族は未だ光を持つて居たから子供心にも己むを得ぬことと感じた然し士族の世間的價値の次第に減じて行く狀況は子供の目にも映じて戸籍でつないで僅に士族の肩書を持つて居るは彼の東郭墮間の祭者の餘りを乞ふて妻妾に驕るの類ではないかと言ふ氣もして來た特に克堂先生の談話に依つて士族と言ふ者か本質的に價値がないのみならず先生は却つて平民として誇りを持つて居らるると感じた。それで余が多年の疑團此に氷釋し余は考へた分家す

ると平民になるそれで先生にあやかることが出来る平民から身を起す決心をする此れが立志の一端となると愈々決心の臍を固めて學校の休暇を待つて家に歸り父に向つて『士族の肩書の價值なき事を語り寧ろ敝履の如く棄去り分家獨立して一家の開山となつて頂きたい』と希望を申述べた父は終始沈黙して聽いて居たが極めて靜かに『此れは家の大事だからよく考へて見よう』と言つた當分してから父は余を呼んで『分家の事は氣にはやつて言ふではないか他日後悔することはあるまいか自分は汝が十分の決心があれば差支ない母は反對だがよくなだめて置いた親類中の考はどうか反對が出来るが又本家の方は數代前からの關係が變更するので多少心配である惡意ですると誤解されては迷惑だ其中親類を廻つて汝が考を述べて同意を求めて見よ』と言つた。

已に兩親の同意を得たから略安心して父の命する儘に親類中を打廻つた始めは突飛な申出と感じたやうだが後には了解賛成し特に姉婿は一家の中興を期せよと大に激勵した。

愈々役所に届出て手續を終つた時は父は重病にかゝり床に就いて居たので寢床の側

で親子三人集つて一家獨立の祝をした余は心の中で克堂先生にあやかる喜を感じた。

## 六、克堂先生の師情……和樂坦易の應接

克堂先生の生徒に接せられる模様は前篇に一通りは述べたが此に少しく補足して置きたい。

先生は生徒に對してよく務められた。務められたのではなく實は青年子弟を愛せられたのである。職責上の務めなどの考よりしては決して先生の様な事は出来るものではない余は先生が生徒を相手にして倦まれた様子を見た事がない生徒は皆年若き連中で無遠慮に推しかける又無遠慮に長坐するが先生は其れ等を相手に諄諄として談じ去り談じ來り時の過ぐるを忘れ居られる。一友余に語つて『佐々先生を尋ねて談話を聞き夜十二時過ぎだから歸らうとすると先生『もう歸るか』と談じ足らない風をされる』と言つたが眞に其通りである。病氣で寢まれた時でも頭に氷嚢を載せながら病を忘れて談話された。余は後年學校長となり生徒に接して退屈した時は常に當年の事を思出

して慚ぢ入るのみであつた。

先生が生徒に訓話される時は言々肺腑を貫く時もないが概して婉曲である急所に迫らうとする時一寸方面を轉換して餘談に入つて緩和し應て又元の談の筋に返へり徐々として談を進められる其處が實に巧妙で何等わざとらしい所がなく波瀾あり抑揚あり頓挫あり開闔あつて一篇の好文章を讀む様で他人の追隨し能はざる所があつたそれで吉田松陰の眞率とは稍趣は變るが和樂坦易に感ずる先生の和樂坦易は一半は先生の天分から一半は王陽明に私淑された結果からと思ふ。陽明の門人は陽明を評して和樂坦易と言つて居るが先生は常に之を引いて程伊川の師道を非難して居られた。

先生は實に親しみ易かつた余も幾多の先輩に接したが先生程親しみ易く感じた先輩はない先生の生徒に對せられる態度は師として子弟に對すると云ふよりは郷黨の先輩が後輩に對する位の態度であつた年少の生徒に對してすら氏名を呼棄にされた事はない先生が坦易であつた例を舉れば先生は寮内の席に就て談される事又外から窓越に談話される事などもあつた或時余が玄關北側の寮内で一友人(狩野直喜君と記憶する)と

窓ぎはで雜談して居ると先生外から歸つて來られたが余等が居るのを認め窓下に足を駐められた其時丁度出水神社に祭典があつて居たので勸進能の談をされる友人はよく應答する先生『何某の井筒はよく出來た』と褒められる余は其頃迄は薩張り能樂の味を解して居なかつたから『彼の井戸端に立つた女が長い間ゆらくして居て實に退屈だつたと言つた先生笑つて『あれが最も味のある所だ能樂の味位は解するがよい』と櫻間伴馬實生九郎梅若實などの比較談をして行かれた。此れに類することとは外にも少はない。

先生と次第に親みが出來て崇拜者たる余は自分から進んで先生の讜咳に接する様になつた氣分の悪い時は先生の書齋に伺ひ談話を聴くと氣分が薩張りする次第次第に伺ふ度數が頻繁になる獨りで行く事もあり又友人を引張つて行く事もある今日は伺ひたいと思ふ時先生が外出して一日歸られない時は非常に寂しさを感じて未だ歸られないかと何度も様子を伺ひに行くやうに迄なつた。

(時習館では先生は生徒を呼び棄したさうだが濟々疊では皆の先生が呼棄にはされな

かつた。校長の飯田先生には一種の呼方があつた某さん又某氏であつた井手氏野田氏など先生の聲音今猶耳底に残つて居る。

## 七、救濟と同情

愉快な學生生活は父の病氣によりて突然大打撃を受けた。余は早速缺席届を出して自宅へ歸り四ヶ月間計り殆不眠不休で看護したが十六年七月三日遂にあへなくなつて余が前途は再び暗黒となつた。負債はあるが財産はない直に母に奉養の途も立てなくてはならぬ全く行き詰つ。此間最も力になつたのは姉婿である『廢學は遺憾である修學の途さへ付けば母は自分が引受ける先づ其方法を講じやうではないか佐々氏にも相談して見よう良き方法があるかも知れない』と勵まして居た。余は喪中で引入つて居ると一日姉婿が來て『此頃古莊嘉門翁が新聞社に來たので君の噂をしたが翁は自分が佐々に談じようと思つていよ／＼兩先生相談の結果君の學資は濟々費から給與される事に極まつた』と告げた。余は救はれて再び暗黒より光明へ出る事を得た此れ偏に

兩先生と姉婿の賜であつた。

猶此喪中で深く感謝したのは先生が長文の弔狀を寄せて『自分が父を失ふた時の事を思出して同情に堪へない』と慰められ弔狀の終には父君の靈前に供せられた數首の詩までも書添へて贈られた事であるが其後先生自身に態々弔儀に見えた芳情には母も余も特に感激したのであつた。

斯くて喪が終つてから自宅はたゞみ置き母と共に一旦昇町の姉婿の内へ引揚げたが余は學校の始業を待つて再び學寮生活をする事となつた。

## 八、邊田見山莊の清話

或休暇の日余は用事あつて御船町に居た親戚甲斐の内を訪ふたが町の入口で友人藤本友世君に行き遇つた。行つて二時間計りすると藤本君が尋ねて來た同君言ふ『佐々先生が高見先生の宅へ來て居て君を伴つて來いと云はれた』と。高見先生とはどんな方か名前すら知らない一寸面喰つたが早速藤本君に同行した途中で藤本君から高見先

生名は志號は林泉などいふ事を聞きながら先生が邊田見山下の閑居に往つた。藤本君は歸つて仕舞つた案内されて一室に罷出る。六疊計りの部屋で書齋と見える。一人の年の行つた風神瀟洒な人が床の前に横臥して居るそれが林泉先生であると感じた其前に克堂先生が坐つて談をして居られる。室に入つて兩先生へ恭しく一禮したが林泉先生横臥のまま身動きもされない『よく來た』とも言はれない余は少し度膽を抜かれた様な氣がした克堂先生は軽く會釋して『君が來て居ると聞いたから呼んだ此内は自分が内も同様だから寛り談して居よ』と言はれて又林泉先生と談を續けられる。室内を見廻すと葡萄酒の瓶など一二本立つて居る然し飲んで居られる様子はない一幅の山水畫が床の間に掛つて居る畫の上に詩がある『送佐々友房歸郷。林泉』として『李白桃紅春滿城、百花風裏愴離情、飄零更作天涯客、柳絮飛時又送君』と書いてある。林泉先生自書自讀で克堂先生との離合聚散を叙せられたものと分つた。眺めて居ると克堂先生振り向いて余に『此處の先生も宮内省に居つたが山岡鐵舟と同時に官を辭して歸つたものだ自分が兄弟同様の人だ』と説明される。林泉先生は何とも言はれない。やがて

少し體をひねつて傍にある文箱の中から詩を書いた詩箋二三枚取り出し投ぐるが如くして余が前に出された推し戴いて拜見すると林泉先生自身の詩もあり他人の詩もある林泉先生は元に戻つて克堂先生と談をつげられる。稍暫くすると又體を少し起し机邊にあつた寫本二三冊をとつて又投ぐるが如くして與へらるる。又推し戴いて拜見する是は林泉先生自身で抄録された者で劉基の詩等も澤山ある又隨筆類より摘録された者もある中には面白い事が多い『王安石曰月中有影山河之影也』と言ふのもあつた頃已に月は地球の兄弟分の如きものと見て居たかと驚く此度は林泉先生起き上り立つて架上の唐本中より四五冊取り出して與へ又横臥される矢張り無言である。こちらにも無言で推し戴き拜見すると全唐詩である讀んで居る中にお茶が出た林泉先生やをら起き上つて茶を飲まれる此時始めて辭をかけられ『茶を飲みなさい』『本は面白いだらう』と言はれる其有様丸で三つ兒あしらひである然し親しみ易い感じがする又其風采態度と克堂先生の談話とによつて世に傲る高士に相違なしと思ふた。余は茶を飲んで居ると兩先生の談話が千如上人の噂に移つた林泉先生は千如上人の爲め辯じたり賞讃した

りして「彼は尋常の學者ではない」と言はれる。克堂先生は「張子房諸葛孔明たる事が出来やうか」と微笑されひよいと話を余に向けて君は劉備の三顧孔明の出慮を如何に解し居るかと問はれる。余は矢張り歴史に書いてある通りに孔明出慮の意はなかつたが劉備が三顧した其知遇に感じて起つたものと思ふと答ふ。先生笑つて「それだから學者は迂濶と言ふのだ徐庶は孔明の意を受けて劉備に遊説した者だ孔明は管仲樂毅を以て自ら任じて居る南陽に高臥して起つ意がないとは解されないではないか」と言はれる林泉先生もさうだくと合槌を打たれる。克堂先生更に歴史を読む時は眼光紙背に徹して真相をつかむ用意が肝要だと注意される克堂先生の爛眼眞に紙背に徹して居ると感心した。兩先生の談話は幕末に移り海舟鐵舟泥舟の書の批評となる林泉先生泥舟が三人中一番能書だと言はれ幅物を鴨居にかけられる。見れば全紙に一寸四方大の楷書が全面に書かれ褚遂良の書風見たやうな見事な楷書で有振れた泥舟とは雲泥の差がある談は海舟と西郷南洲の關係に及ぶ林泉先生一幅の海舟の書を鴨居にかけられる南洲を追懐した五言短古である讀んで「笑抛此殘骸以付數弟子」に至り克堂先生余

を顧みて「己れの體はおはん達にやる」と言つた此二句が眞に西郷の心事を言盡して居ると稱揚される。兩先生の談は盡きないが最早夕刻になつたから座を起て歸らんとしたが兩先生とも夕食を濟まして歸れと言はれる無簇の様ではあるが勧めらるるまゝに留つた。晩食の時は場所を變へられた書齋から一つ隔つた西側の部屋で三人鼎坐する。窓を明けると西南一帯の野景が展開され心目を醒す。食品は簡素である然し食事は面白くした。後年蘇東坡が黃州に居る時定めた客の待遇法を讀んで此時の事を思ひ出して首肯した事がある。

日が晩れたので兩先生へ厚く御禮を申述べて甲斐方に還つたが翌朝食事を濟まし一寸林泉先生の宅へ伺ひ昨日の御禮を述べた。克堂先生は泊つて居られた余が歸らうとしたら「自分も今から歸る其處迄一處に行かうではないか」と言はれる隨行して門を出れば先生行々林泉先生の人となりを稱揚して「高見は十年間も宮内省に居ながら一度も長官の宅に行かなかつた中々傲骨だ」と語られる。御船川に沿ふて下りである所に至れば先生足を止めて東南を指さし「彼山を盜塚、此山を駒返と言ふ白旗は彼れ」

と指點し『自分が陣所は彼所、深地が居たのは此處、官軍の攻めて來たのは何方から』と一々説明され盜塚駒返等地名もよくなかつた矢張り士氣に關する。清正公が熊本城を築かるる時第一に選定されたのは玉名の横島であつたが横島は邪に通するので清正は棄てられたと聞いて居る。水盜泉と名ついて墨子飲ますとも言ひ傳へて居る矢張地名を選ぶ必要があると語り更に又戰爭談に移り自分は早く御船の陣地を棄る策を建てたが採用されず逡巡の間に敵の爲に乗せられ大敗した。又兵を潜めて熊本の前を衝くか甲佐方面に突撃するかの策に出たかつたが大將躊躇して其れも時機を失つたと幾度か低徊願望して感慨に時を移された。余は談話を聽き應答しつゝ後に跟いて行つたが御船町近くに來た時先生と別れた。先生は折れて他の道を行かれる余は隨行して歸りたかつたが用事が残つて居るので心を残して先生と別れた。

因に云ふ余は之を機縁として其後度々林泉先生の間居を叩き教を受けた。

## 九、適性教育の一斑

濟々費と言へば何人の耳にも直に武道の盛なる學校と響く。然し余は其處で修業しながら劍道も柔道もやつて居ない。克堂先生の教育を語るに就ては其理由を語る必要がある。

濟々費の武道も當初は必修科ではなかつたが後漸次勸告して生徒に皆必修させる事になつた。生徒も皆能く勵んで又旨く使つた。余は劍道も柔道も素養がないので今更ら其中に飛び込みかね躊躇して居た。或日學校玄関前に立つて掛額に『内正其心外修其行』と書いた山岡鐵舟の筆蹟を眺めて居ると克堂先生通掛られ今から劍術を看ようではないかと言はるる。余は直に其跟について行つた『以前稽古した事があるか』と聞かれる『ない』と答へる。先生歩きながら『劍術の如きも千篇一律に課するはよくない時習館で竹添(井々)井上(梧陰)の様な人を捉へて強いてやらせたのは間違つて居る狩野の如き君の如きはやらぬでもよい』と言はれたがやがて愈々出席は免せられた是れ余が武道をやらなかつた理由で是れが又克堂先生適性教育の片鱗の顯はれである。余が入學前に武育の素養がなかつた事については少し横道に入る様だが挿話として

少しく述べる。

余が建部の住居に近く「久武」といふ四天流師範の家があつたが余が家とは特別懇意で殆親戚の様に交際して居た其處の長男に虎人と言ふ人があつて余よりは六七歳年長者であるが余は其人と大分長い間机を並べて本を讀んだ。學問の方は餘り長所でないので余が指導者の役を承る事も尠くなかつた。余が十二歳の時と記憶する或日父は余を呼んで「文事あるものは武備あり」又「文武は車の兩輪である」汝久武先生に入門して劍術を學べと言ふ。余は一も二もなく承知したから直に父に連れられて久武家に往き正式に入門の手續をした先づ居合から始めた稽古の時は先生は坐つて見て居られ實際の教授は虎人君が代見として之に當る。虎人君は天賦と家學と相待つて劍道には餘程上達し人物は玲瓏玉の様で余も忘年の交をして居た。然し虎人君の教授と聞いて一寸面喰つたが文武交換と諦めた先づ短き輕き刀より始めて長く重き刀に移り一通修得した。今度は愈々竹刀を持つた居合は一人下やるから先づ無難であつたが劍術は虎人君に立向はねばならぬ。始めると右に推やられ左にはねられ後にはり倒され前に打ち

ふせられ宛も鞠の如くに取扱はれるので自稱學問代見の權威失墜する事夥しい「殘念」と思ひ勵んで見たがとて上達出來さうにないので稽古はやめて仕舞つて老先生が勸告に見えても言を左右に託して到頭行かなかつた。それで濟々巒に入學した時は最早武備なき片輪に發達して居た。

談は元に返るが先生の教育は所謂適性教育で先づ其人をして己の長ずる所の何れに在るかを自覺せしめ而して其れに従つて進修の志を立てしむることが眼目であつた余一人の例によつても先生の指導誘掖の仕方が察せらるると思ふ。余は入學の始に於て先づ一番に立志の必要を説き聞かされた。其後又書齋に呼ばれて「言志」といふ文題を興へ深思熟考して書く様に命せられた或時は君は儒林列傳に入る覺悟をするが適當と思ふと注意を促された。或時は王陽明の立志説を翫味したかと問はれた。又或時は宋代の學者達が往々科擧を厭ふて學問に没頭した事を強調して談せられた。又或時は王陽明が年少已に試験登第が第一等の事となすに足らざるを知つたと言ふことについては特に感嘆して語られた。折に觸れ事に會い余に對して誘發し刺撃し獎勵し鼓舞し



作興されたこと實に至らざる所なかつたそれで余は先生の傍に侍坐する時は何日も感激の状態にあつた事を告白する。

### 十、道義的練磨 克堂先生の教訓

林泉先生の山莊清遊の後幾日か経て克堂先生は余を呼んで余が漢作文中最得意のもの數篇を選んで持ち來れと命せらる。余は早速四五篇を撰出した其中加藤清正論と言ふのがあつた此文章は嘗て栃原先生に批正を乞ふた處頗る好評を得たので子供心にも聊か得意の作であつた。其論旨は清正の信仰は英雄人を歎くの術策で眞に信じたのではない南無妙法蓮華經の旗を推し立て軍を行るのは陳涉の篝火狐鳴又織田信長の鼙中鳴甲と同様衆を鼓舞する手段に過ぎない然るに今日に至る迄世人が其れに瞞過されて居るのは愚亦甚しと論斷したもので清正公に對しては失禮千萬なものであつた。清書を畢つて直に携へ先生の書齋に伺ひ差上げた先生は何か用事で受取られた儘机の抽斗に入れて仕舞はれた。

其後先生は右の作文に就いては別に噂もされなかつたが余も亦意に介しもしなかつた。二ヶ月ばかりも経た後或日先生の書齋で歴史上の人物の評論を聽いて居たが關ヶ原戦時の清正に談話が移つて來た時不圖『君が清正論は』と言掛けられた。余は彼れがまだ先生の記憶にあつたかと思ふた。先生は續いて『彼の文章は文人筆を弄ぶ類であるか

(文人筆を弄ぶとは支那若くは徳川時代の文人には唯文章を面白くする爲に心にもない奇抜なことを書くのがある先生は其意味で言はれた)

又は眞に彼の通りに考へて書いたのであるか』と問はれた。余は眞に彼の通りに考へて居ると答へた。先生『果して彼の通り考へて居たら其れは大に誤つて居る清正は眞に信佛者である』と一二の例證を擧げさて人間は死生の間に出入すると神か佛に頼りたくなるそれで戦國時代の豪傑は清正に限らず皆心の奥底に神か佛か何か一つたよるものを持つて居たそれが無ければ安心立命が出来ない甘んじて死地に就けない。楠正成の如きも同様であつた君は机の上から見るから誤るそれは實際死地を踏んで見なけ

れば分らぬ自分は西南戦役で三十餘回戦争をやつて居るからよく其味が分つて又清正の心中も了解して居る術策ではない眞の信仰であつた』と言はれる。余は先生の教によつて能く了解したことを述べ進んで神佛の信仰がなければ安心立命が出来ない甘んじて死地に就けないと先生の言はれた辭に就いて『道理貫心肝忠義填骨髓直須談笑於死生之際』と言ふ蘇東坡の語を擧げて此れで安心立命が出来ぬ必ずしも神佛に頼るを要しないと思ふ旨を述べると先生微笑して『戰國時代の武士は若い時から戦争を日常の仕事として居て何日死ぬるかも分らない所謂今日あつて明日ない身であるから萬事直截簡易を貴ぶ死生の悟りも簡易に出来なくては何に合はない六ヶ敷い理窟など考へて居る暇はないそれで佛か神にたよることになるのは當然である然し』と言つて又談を元に返し蘇東坡の前きの語を擧げ御互は此れで立つが此信念で立ち得る迄には餘程練らねばならぬ並大抵な工夫では出来ない練ると言ふと矢張り孟子の養氣に歸着する客氣では勿論出来ない。又『義襲ふて取る』ことも出来ない『集義の成る所で』始めて出来るのである。佐賀の江藤新平長州の前原一誠の如き自ら一世の豪傑を以て任じて

居たが刑場に於ける手際は豪傑の名に負いた彼等は畢竟客氣で大賭博を打たんとして失敗し死に撞着して客氣は消滅し自ら内に顧みては何物をも持たなかつたから彼の様にな不始末をしたと結び更に話を二轉して津田静一先生を稱揚せられ津田こそ實によく練り上げた人物だ彼は獨りで天下を相手にして戦ふ勇氣を持つて居るが少年の時は温和一方で人の前に出るとはに cand で直ぐに顔を眞赤にして居たが道義を以て練り立てた結果人物が全く一變して今日の津田が出来た御互も練磨が肝要だと強調して談話を畢はられた。

余は感謝して引下つたが此時も大な啓發を受けたと感じた。余は平生の學問の仕方が上滑りして居た事及び練磨の重要な事を痛切に感じたと同時に津田先生の例を擧げられた事に就いては練磨の過程を目の前に突出して直觀せしめられた感じをした。

其年の冬の事である或日先生の書齋に伺ふと先生の机の上に經國美談と言ふ本が載せてあつた。如何なる本であるかを伺ふと『面白い小説である讀んで見よ』と本を取

つて渡された。拜借して寮に還へり讀むと非常に面白い到頭徹夜して讀み畢つた。余は始めて小説を讀んだから特に面白味を感じた再讀三讀したが猶反覆したかつた位である。幾多の友人にも轉貸して讀ませた大分長い間拜借して居り先生に返上したのは翌年の一月頃であつたと記憶する。非常に面白く讀んだ事を述べ返上する。先生は微笑して『ペロピダス』と『レオナ』の會見が一番面白くはなかつたかと冗談を言はれた。

其後或日二三の友人と一所に先生の書齋に伺ふた皆經國美談を讀んだ連中と記憶する。談が此小説に及んだすると先生は此小説中に描き出された二人の主人公『ペロピダス』と『エバミノンタス』の批評をされた。先生は『ペロピダス』の勇を以て客氣となし彼れが郷國の事を思ひ焦慮の結果單身アテネを立ちてテーベに歸らんとして山間の徑路に踏迷ひ漸く一軒の茅屋を認めて一夜の宿を乞得たが主人老哲學者の高風に接して其思慮深き諷諭に會ひ茫然として自失し意氣頓に消沈したる有様を擧げ作者が客氣の持むに足らざる事をよく描き出したと賞讃され更にエバミノンタスを道義的に養ひ得たる勇者と爲して彼れが獄中に在りて死刑を待つ間にも身心の練磨を怠らず従容死

に就かんとする有様を擧げて道義的勇氣の英雄を描き出さんとして作者が特に意を用ひた所かと賞讃された。余は終始傾聴して居て前に余に與へられた教訓と思ひ合せて先生平生の用意の存する所もよく了解した。

「練る」と言ふ詞につき……………克堂先生も飯田先生もよく此詞を使用されたが今の「修養」と略同意義に聞えて居た但し學問上の知識を體得せんが爲に工夫を凝らす意味が比較的痛切に響て居た様で書上の練磨も事上の練磨も並び含まれて居ると思ふ克堂先生は常に言つて居られた「我が濟々疊は知識を授けるのが目的ではない根抵となる力所謂底力を作るのが主眼である銘々は其作られた方を基として進修して知識も求むべく又事にも當るべきである」と其底力を作る鍵は何か即ち「練る」ことである。兩先生の常套語は自然生徒間にも流傳してよく使用された此詞には濟々疊訓育の重要な意義が含まれて居たから説明を加へて置く。

左の談話は先生當時の宗教に對する態度を知るに足ると思ふので本題には直接關係はないが前の談話が信仰に及んで居る關係で此に附記する。

談話一日宗教に及ぶ先生は言はれる『信念の固きは耶蘇教信者を第一とする到底佛教信者の及ぶ所でない畢竟教旨が簡明で要領得易きためだと思ふ我輩が之に對して駁撃を加ふるは其の教徒が往々國牀の基礎を傷ける言論をなすが爲だ其れさへなければ耶蘇教佛教を差別する必要はない我輩は佛教徒が若し國牀の基礎を傷ける言動をする時は矢張起つて之を攻撃せざるを得ない自分は嘗て大洲鐵然(當時の本願寺執行長)に此談をしたが彼れ一々首肯して我等が耶蘇教に對するも君と同様の考である君の心配して居られる點さへなければ自分等も耶蘇教と併立して行くに何等の異存はないと言つた彼れは能く譯の分つた僧侶で彼の仲間の傑物である』と稱揚し更に進んで『現在の耶蘇教は西洋人に依つて輸入されたので彼等は各々其本國の國風並に慣習を其儘持ち來つて其を直に我國に當て符めようとして居るそれで困る其點を大に攻撃すると他日は耶蘇教も日本的になると思ふ』と結ばれた。

先生の態度は此通りであつた新島襄氏に關した事は已に述べたが當時の伊勢時雄氏(後の横井氏)をも頗る推重して居られた機會があらば一度伊勢の話をして見よと勧められた事もあつて或時伊勢氏が忘吾會場に講演した際余等在巒の諸友數名相携へて參聽したこともあつた。

### 十一、氣質變化の試み 克堂先生の教訓

余が性格上の缺點矯正を試みたるに就ては克堂先生の教訓に負ふ所多大である若し少しでも其試みが効果を得たとすれば一部は父の賜であるが大部分は先生の賜と感謝して居る。それにつき克堂先生の教訓を述べんとするには勢濟々疊入學前に遡らねばならぬ『人自ら知らざるを苦む』己を知ることには實に難い余が性格上の缺點を自覺した事は餘程遅かつた一つは自覺を促す機會に乏しかつた爲かと思ふ。

余は八歳の時一日孟子を素讀して居たが『思與鄉人立其冠不正望々然去之』と言ふ所で父に其處の意義を問ふた父は説明して聽かせ他日汝が仕さうな事だと笑つた此時

分から父は既に余が缺點の何處に在るかを認めて居たと思ふ。

九歳の頃は余は大の孔子尊信者になつて居た丁度其頃父は余を携へて或人の内に行つた。皆打寄つて談話して中其人が余にからかつて孔子を輕侮し野合の子であるなど色々猥褻の言を吐いた。余は憤怒の絶頂に達して終始一語を發しなかつた。餘程血相が悪かつたと見え父は余を促し勿々に座を立つて歸宅した事もあつた。

若し余が大勢の學童の間に揉まれて生長せしならば仲間の制裁で缺點の増長を抑へたであらうが其機會がなかつた。

余は幼名を政雄と言つたが子供の癖に徳川時代の儒者に倣ひ通稱の外に今一つ名とか字とかを欲しかつた。十五歳の時と記憶する父に其事を申出でた。父は二三日考へて余に「惠」と命げ様と言つた父が言ふには「汝は峭直である餘り潔癖である怒り易い僅な事にも直に辭に稜が立つ今の様では生長した後人と交際も出来ないそれで柳下惠を學べ柳下惠にあやかる意味で名は惠とつけよう」と言つた訓誡に對しては不服は言はなかつた唯惠の字面が嫌いと言つた父は二三日考へて今度は「寛」と名つけると言ふ

漢の劉寛にあやかり寛大で容易に怒らぬ人間になれ名は寛通稱は政雄でよいと言つた此れには別に異論なく承服した。其後余は漢書の龜錯傳を讀んで居る時父は傍に來て一瞥し余が感想を聞いた余は龜錯が漢の爲に謀つて却て讒言によりて死刑に處せられたのは實に憫然だと言つた。父は錯が性格の峭直刻深とある所を指摘し失敗は當然であると言つて熟讀せよと命じた。

父が與へた訓誡に對して余も稍々反省して缺點を認識する様になつた然し痛切に其れを矯正しようと感じる様になつたのは克堂先生に親炙後であつた。

先生は余が入學後早くも余が缺點を看破された。余は在學中折に觸れて幾度か訓誡を受けたと感じて居る。但し先生の訓誡は露骨ではなく雑話の中か或は歴史上の人物評の中に訓誡が見出さるのであつて直接缺點を指摘された時も辭は簡單であつた。余が入學の翌春先生は談話の序に『山峭なる者は崩る』君は成る可く寛厚の徳を養へと言はれた。此れが直接缺點を指摘された第一回で辭はそれ丈であつたが唯此一言に余は非常に強い刺戟を受けた。それで余は父が訓誡又寛と命名した事等を語つて矯正

の決心を告げた(此れが正式に寛と改名した原因である)

余は訓誨の刺撃から引いては宋儒の氣質變化の説に深き注意を向ける様になつて又變化の可能をも確信したので狭量を變じて宏量とし刻深を變じて敦厚とし多言を變じて寡言とし輕躁を變じて沈重としようなど根本的に氣質を變化しようとし無理なことをも企つるに至つた。

斯く決心はしたものの性格の缺點牢乎として抜くべくもない其上余が努力には斷層が出来勝ちで従つて試み従つて廢し矛盾撞着の生活をのみ繼續した。然るに余は一方には勝氣強く功名心も熾烈矢張り十八九歳の青年心理状態で生意氣にも陳龍川を學ぼうと考へたり蘇東坡を尸祝したり又一轉しては傳習錄に没頭して一氣に超乘して上らんと焦燥つたりしたので自己の缺點に壓力を加へんしながら勝氣は一方から却つて之を鼓舞し知らざる間に反動が起つて來る事もあつた。加之或時期に於ては學校内部にも余が缺點を挑發するが如き事情(一例を舉ぐれば生徒間に弱を凌ぐ弊風の發生した如き)少くなかつたので克堂先生に對する時は柔順至極な余も他の先生に對して

は必ずしもそうでない。時としては逆襲もし又突撃もした。それで或先生は余に對して君は野田寛と言ふよりは野田角と言つた方が似合はしい時々我輩を突くからと言つて角、角、と呼ばれた事もあつた。

或時余は學校内部の事情に就て不平の餘り申附かつて居た室長を辭したいと思ひ克堂先生の東京より歸りを待ち受けて申出た此の時が缺點を指摘された第二回目であつた。先生『君は餘りに潔癖にならぬ様にせよ水清ければ魚なしと言ふではないか』と諭し思ひ止まれと言はれた辭は少なかつたが余は先生に對すると不平がなくなつて宛も光風霽月の如き氣分で自己の修行の足らざることを陳謝し寮に歸つた。

然し在學中は氣質變化の修行は到頭成果を見なかつた上京して後も動もすれば舊缺點をさらけ出したが二十六七歳に至つては漸く克堂先生訓誨に負かない事が出来ると思ふ自信を持つに至つた。此處に一つの挿話として述べる。

余は明治二十六年九月前の九州學院普通學部(濟々費)の教員となつたのは全く克堂先生の意志によつたのであるが或時井芹經平君と雜談して居ると井芹君は『昨年君が

歸て來ると佐々先生より通知があつた時は實に厄介な難物が飛込んだと職員皆眉をひそめた然し條理あることを言つて一度も君から反對を受けた事はない已に一年も交際したが大に世評と違ふは如何」と言ふ。余は最早角は落して唯痕迹を残し居るのみだと笑つた。

余が家には『尙寬』といふ扁額を楹間に掛けて居るが此れは今猶先生と父との教訓を忘れぬ爲である。

左の談話は本題に稍々關係有つて又余に對しては一大教訓であるから併せて此處に述べることにする。

在甞中或日先生と對談中支那漢代の史論に入り吳楚七國の反亂より鼂錯の人物論に及んだ余は錯か之を削るも亦反し削らざるも亦反すと言つた主張は正當ではないかと質した。先生「削るは善し然し錯は削るに就ての覺悟がなくてはならぬ自分は蘇東坡の意見が千古の確論と思ふ」と言つて東坡が鼂錯論中の

唯仁人君子豪傑の士能く身を出し天下の爲に大難を犯し以て大功をなすを求むるを爲す。此れ固より期月の間に勉強して苟も以て名を求むる者の能する所に非ず。天下治平故無くして大難の端を發せんに吾能く之を發し吾能く之を收めて然後能く難を天下に免る。云々

の語を誦して特に力を入れて左の如く語られた「この通ではないか鼂錯自ら吳楚七國の亂を誘發する以上は自ら之を收むる覺悟で身を捨て、掛らねばならぬ錯は自ら誘發した大難の衝に當るを避け安全の地に居らんとしたそんな考では大事に當れない凡そ何事にせよ難局に當る以上は『生きる』と言ふ考は始めから捨てて掛らねば成し得ない」と。従來東坡の鼂錯論は幾度も讀んだ文章だ然し深く翫味して居なかつたが先生の指摘と敷衍とによりて大な啓發を受けたと感じた又父の教訓をも思出したので先生の談話に強き刺撃も感じた。余は政治の局面に立ちたる事なく又大な事業の經營に當つた事もない單に中等學校の教員として終始したに過ぎないから眞に難局と言ふべき難局に當つた事はない所謂多寡の知れた者だ然し明治三十年前後に於て濟々甞改革の

衝路に立ち其後熊本中學校經營の任に當つた時稍難件と思ふ事に臨む度に頭の中で一番最初に活潑に閃いて來るものは此時の先生の談話であつて他の書籍から得た知識は何日も其跡から跟いて來たに過ぎなかつた。

## 十二、讀書に就ての注意と特別授業

克堂先生は讀書眼が鋭く讀書に當ては早く要領を提ること又直に言語文辭に表出されて居ない或物を把握することに長じて居られたそれで先生の歴史談は特に興味が多い先生は生徒に對しても常に其處の提撕に氣をつけて居られた彼の邊田見の山莊に於ける談話の如も其一例である。先生は平素佐賀の枝吉神陽を推尊された神陽は副島種臣伯の兄で早世した人で佐賀の人材多くは其門に出づると稱せられて居る。神陽嘗て門人を集めて講讀した時突然門人に問ふて言ふ舜の聖人たる所は何處に在るかと門人皆舜の大孝を擧げて答へる神陽聲を勵まして言ふ『君達の様な本の讀み方をしては學問は死んで仕舞ふ舜の聖人たる所は書經に書いてある共工を幽州に流し謹兜を崇山に政

ち三苗を三危に竄し鯀を羽山に謹し四罪して天下皆服した所にあるではないか今少し氣を付けよ』と叱つたと言ふ話。此話を例にとつて生徒に讀書の注意をされたことは幾度もあつた。

余は教場で先生から正規の授業を受けた事はない。明治十八年の秋或日先生に向つて従來教場に於ける學習の仕方には満足出來なかつた事を述べて文字章句の研究は獨力にてもなし得る今少し活眼を開いて活書を讀み度い就ては先生直接指導の方法を取つて戴き度いと申出た。先生は暫く沈吟して居られたが宜しい一所に本を讀む事にしてようそれで同志を少し集めて見よ餘り多いとよくない五六人乃至十人位がよい本は文義の研究をする譯ではないから外史にしよう外史を輪番で讀み流がし要所要所で止めて其れを題にして談話することにし一週一回にして日曜日の朝六時からやる自分は朝寢の癖があるから君毎回來て起して呉れよと快く承諾された。余は早速同志を語らひ六七人を得たから直に開會する事になつた。余は先生が申附の通り毎日曜の朝行つて先生を起し學校の二階の教室に集つて待つて居ると先生はやつて來られる示された通



りに輪番で外史を讀んで行く中先生は讀方を中止され書中に表はれた人物及び其處事の批評又は其當時の時局に就ての批評をし時には轉じて時事問題にも入り談論混々として盡きない朝食を抜きにして十時頃迄打通にやられた先生油の乗つた時は十一時頃に及んだこともあるが趣味津々として盡きないから聽者も時間の立つのを忘れて聽いた。然し此會も十回餘繼續したゞけで後は先生が多忙になられた爲に中止した。但し期間は短かつたが余に取つては在學中正規の教課よりは餘程有益であつたと記憶して居る。

### 十二、克堂先生の述懐

或時先生の書齋に伺ふと其時の談話は濟々疊の創立及び其經營に移つたが先生急轉直下して自分が去らば跡は如何と問はれた。余は非常に驚愕して『生徒は皆先生を慕ふて集つて居る萬一先生去られるとなれば皆退學するに違はない自分も一番に退學する學校は直に滅亡の外あるまい』と答へた。先生『そんな考では困る此學校は卒業生

で維持して行く位な覺悟がなくてはならぬ』と言つて更に話を進めて『自分も此通り子弟を集め其教育に力めて居るが一は西南戦争で多く熊本の子弟を死なせた罪滅しの爲でもある。さればと言つて長く今の様にして居る譯には行かぬ自分が本來の志は政治であるから一度は中原に打て出る。それで去つた後の事も考へて置かねばならぬ』と言はれた。余は濟々疊が今にも頼れて頭上に落ち來る様な氣がして悄然として今直に去らるるかを問ふた。先生微笑して『今直ではない少し後のことだ』と言はれ余も稍安心した。

先生更に話頭を轉じて『自分は今學校を主にして居るが政治にも關係して居る其事は君も知つて居る通りだが政界は實に危険である。自分は世の風潮に反抗して一の政治主義を立て居るから主義の爲に戦ふ場合には危険を犯すこともある現在でも牢獄に投せらるる事が起らぬとは言へないさて其時になると多年心血を濺いで養成した子弟でも自分に跟いて來る者は容易にあるまい』と述懐された。余は言下に唯『それは有ります』と答へた然しあとは何とも言へなかつた。先生黙して又やがて話頭を他に轉

せられた。

先生の書齋を出でて寮に歸り席に就て靜に考へた。『自分は母を養はねばならぬ然し今先生の身上に非常な事が起つたとすれば其場合に安閑として居る事は到底出来ない母の事は姉の方で何とか世話が出来やう其時は自分も決心するのみだ』と。

余が先生に對する崇拜は此時を以て絶頂に達した。

#### 十四、擱筆

余が克堂先生より受けた恩誼の多大なる事は實に言語に絶するので此編に表はしたのは僅に其一斑に過ぎない。余が濟々豊卒業後多年東京に遊學したるも亦歸り來て教育界に入りたるも皆先生の賜であるが其他有形無形恩誼の數々一々之を列擧する違がない「生我者父母知我者鮑子」とは管仲が鮑叔に對して友誼を感謝した辭で引て先生に擬するは禮を失するも知遇を受けた點よりしては斯くも言ひたい。先生の恩は我を教へ我を勵まし我を誘ひ我を裁する師の恩と「我を長し我を育し我を顧み我を復する」

父母の恩とを兼ね之に加ふるに知己の恩を以てしたので「之が徳を報せんと欲すれば昊天極りなし」の感に堪へない然し遂に其萬分の一をも報い得なかつたのは罪亦多大と言はねばならぬ。

獨坐瞑目して在曩中の事を默想すれば立言不朽を以て獎勵され儒林列傳に入れと鼓舞された先生の音容今猶眼前に髣髴する。而かも大學に遊びながら蒲柳の弱質歲月の半は藥餌に親み何等の成業を見ず歸來教育界に投じては緒を紹て遺業を恢弘する事も爲し得ず五十有餘年の歲月を無爲無能に過ごして徒に餘生を蓬蒿の間に送り師の教に負き並に知己の期待に負くこと實に慚愧の至りである。仰いで楣間に掲げた先生の肖像に對し嘆息の儘筆を擱く。

昭和六年三月十五日午後十二時 蓬蒿園に於て 寬